資料紹介

日本外史の清版とフランス訳

石原道博

一　まえがき

「日本外史」二十二巻はいうまでもなく頼山陽（1780–1832）の著わすところ、わが安永九年＝清の乾隆四十五年に生まれ、天保三年＝道光十二年に歿している。「日本外史」の巻頭に文政十年＝道光七年（1827）の松平定信にたてまつる書をのせているから、かれの四十八歳の著作である。司馬遷の「史記」世家の体裁にならつて書かれているから、中国正史の影響をうけたわが「六国史」以下の勅撰・官撰の正史に準拠したものであることは明らかである。その内容は、たとえば「源平盛衰記」「太平記」などから材料をとつているから、いわば興味本位、すくなくともいわゆる物語的歴史、ないし教訓的歴史の傾向のつよいことも事実である。したがつていわゆる発展的歴史（史学）の立場からいえば、その史実・史観についてもいろいろ異論や批判のあるところであるが、幸か不幸か「日本外史」的史実・史観が、従来わが国民のあいだに広く浸透してきたことも事実である。手近かな書目をひもといてみても、「日本外史」にかんする参考文献の翻刻されたものが百種以上もあり、日本全国にわたつて日本史入門のテキストとして江戸時代以来いかに広く採用されたかがうかがわれる。私の中学時代にも「日本外史」が漢文のテキストであつたことが想起されるが、現在私のもつている日本史の知識も多く外史の記事が先入主になつているようである。かの外史氏曰、云々の論賛のごときは、おのずからこれを暗誦したものである。ちようど中国史、ないし東洋史の知識が、多く「十八史略」的であるのと好い対象をなしていると思う。

私がここで頭書のようなテーマをとりあげたのは二つの理由がある。第一は、「日本外史」の清版のことや中国に及ぼした影響などが従来あまりしられていないこと、英訳やロシア訳のことはしられているがフランス訳のことはしられていないこと、すなわちその史料的価値の紹介が必要であること。第二は、右の両者を比較して中国人とフランス人の史観の相違がみられること。日本および日本人、ないし日本史にたいする認識が、「日本外史」を通じて日本人・中国人・欧米人のあいだに深い影響をあたえているだけに、ここに掲

げたような問題もけつして小さいとはいわれないのである。

二　清版日本外史

日本外史の清版には、私のしつているものにつぎの三種がある。

一　日本外史　光緒元年（明治八年　1875）広東

二　日本外史　同五年（明治十二年　1879）上海

三　日本外史　同二十八年（明治三十五年　1902）文賢閣石刻本

ここでは手許にある第二のものについてのべる。一帙十二冊本で、帙に「日本外史評」と題してあるが、第一冊の第一葉オモテには「頼襄子成著　日本外史　錢懌子琴評閲」とあり、そのウラには「光緒己卯（五年　1879）孟春日　上海読史堂新版」とある。子琴は錢懌の字であるが、つぎに光緒三年丁丑（1877）十月の玉谿甫の「日本外史序」がみえる。

（上略）孟冬十月、錢君子琴、手持日本外史眎余云、是日本頼子成所著。余受而読之、筆老気充、厳議正、如読太史公史記。令人百読不厭、不朽之作也。観其外史詳明、則国史之厳密、更可知矣。吾友子琴、批語精邃、引似入勝、可為読史之一助。余年老、筆禿無革、忘其固陋、遂援筆而為之序。

つづいて光緒四年戊寅（1878）十月の錢懌の「序」があるが、日本外史の翻刻によつて日本史を知ろうとしたこと歴然である。つぎに「凡例」「総評」がみえ、本文は半葉十一行二十二字詰。上部欄外に錢懌の標註的評論（頭註）が簡潔にしるされる。いわゆる外史氏曰、云々の論賛のあとには、右に擬した読史氏曰、云々の錢懌の評賛がみえている。

いま一例を、私の専攻する日明交渉史にちなんで巻一七徳川氏前記・豊臣氏論賛のところを引用すると、頭註の論評は、たとえば「相提並論、極賛美之意」「転変霊動、開下文一段議論」「一眼覷定」「筆挾風霜」のごとくであるが、外史氏曰、云々の左のところのごときは、みだりに潤删を加えているのがめだつ。

A外史氏曰……嗚呼使太閤生於女直・靺鞨間、而仮之以年、則烏知覆朱明之国者、無不待覚羅氏哉。

B嗚呼使太閤（史）之武功、済以文徳、而仮之以年、則近攻遠交、其開疆拓土、又烏可量哉（巻一七・三十一ウ）。

これはいうまでもなく清版であるところから、錢懌が女直・靺鞨とか、朱明の国とか、〔愛親〕覚羅氏とかの語句をさけて恣ままに潤删したものであるが、それはともかく全体としては「日本外史」の史実・史観をおおむね肯定し、多くはすこぶるこれに憧憬し賛意を表しており、外史氏の論賛にたいして読史氏の評賛ともいうべく、

根本的な批判の面はほとんどまれである。

これにたいし対照的なのが、つぎにのべるフランス訳である。

三　フランス訳日本外史

昭和十一年、中山久四郎博士が外遊記念に将来された新収典籍のうちにフランス訳の日本外史がある。その第一巻の表紙をしるせばつぎのごとくである。

HISTOIRE DES TAIRA
TIRÉE DU
NIT-PON GWAI-SI
TRADUIT DU CHINOIS PAR
FRANÇOIS TURRETTINI

EXTRAIT DE L'ATSUME GUSA

GENÈVE, H. GEORG, LIBRAIRE-ÉDITEUR
PARIS, ERNEST LEROUX　LONDON, TRUBNER AND Co
1874～75

日本外史を NITT-PON GWAI-SI とローマナイズしているが、François Turrettini については詳かでない。ATSUME GUSA というのも何か天草版のようなものであろうか。ジュネーヴで発行されているが、パリ・ロンドンでも発売されたのであろう。英訳もこの仏訳によつたのであろうか。一八七四―七五年は清の同治十三年―光緒元年（明治七―八年）であるから、最初の清版（広東）より一年早く、相前後して出版されたわけである。つぎに序文をみると、つぎのように記されている。

すでに刊行した平家物語第一章からの翻訳において、読者は平家の盛衰を物語るこの歴史小説がいかなるものであるか、その概念をつかまれたことと思う。後を続けるにさきだつて、平家物語の土台ともなつた歴史的事実の概要を、この巻に提示しておきたい。

以下の頁は日本外史からの抜萃で、二十二冊をもつて成りたつこの日本歴史の第一冊、その四枚目から四十九枚目まで（の内容）を包含している。話は壇の浦の悲劇的結末の後からはじまり、平家の末孫盛継（Moritsugu）が見つけだされ、冷情な頼朝によつて死に処せられるまで続く。この作品はきわめて巧みに書かれてありとされ、定評を受けているのであるが、ヨーロッパの読者はわれわれ同時代の史家たちと区別されるどのような優れたところも見出さないのではなかろうか。物語の各部分の間には多く均衡が欠けており、ここに長広舌があるかと思えば、また簡略にすぎた議論があり、そちらにはさして重要でもなければお互いに脈絡もない事実の列挙で、まつたく逸話の仮綴本といつた具合なのである。

ここで注目されるのは、本文の人名・地名・官名などに漢字を添

えていることのほか、日本外史の叙述形式、史実、史観などにたいし鋭利な史眼をもつて批判していることであり、少くともわれわれがこんにち「日本外史」の欠点とみなしている点を、ゆくりなくも明確に指摘していることである。ここに従来の日本（中国）史学とフランス（西欧）史学との相違、区別をもみることができると思う。

古来、中国史学の伝統は「史記」「漢書」にはじまり、いわゆる正史の叙述形式は「清史稿」にいたるまで連綿としてその流れをくむ。ことに儒教の徳治主義を政教の正統としてからは、「資治通鑑」によつて代表される教訓的歴史がその主流をなしたが、日本の史学・史観もまた中国の影響によつて、ほぼ同様の発展をとげて明治時代におよんだ。したがつて「日本外史」が中国人によつて一応肯定的な立場で受入れられたことはむしろ当然であり、これに反し、史実考証を中心とする発展的歴史に培われた西欧において、「日本外史」が中国なみに受入れられなかつたのも、これまた当然のことであろう。

若狭の油桐栽培の史料

今度若々者、不量ニ桐切申候儀ニ、曲事之由、仰かけられ候条、種々御理申、殊更両庄為両人と、色々御侘言申候へ共、無御分別候之間、則ありのまま桐数少も不置隠、持せ被参候上者、両人之者共涯分在所中ヲせんさく申、少も技葉迄のこさす被参候上者、聊偽申候者、諸神諸仏之御罰可蒙者也、仍如件、

天正拾七年二月拾九日　　別　当（花押）

御賀尾浦　刀祢　百姓中　　和徳門尉（花押）

参

この文書は、この夏、京大国史・地理研究室が共同で行った若狭の漁村調査の際、三方郡三方町字神子の大音所蔵文書中に見出されたものである。文中の桐とは油桐のことである。この実からとった桐油は、むかし主に燈用にされ、また紙に塗って桐油紙を作った。山腹を利用しうるので、耕地の少い村落では油桐栽培は相当有利であったらしく、中世末より各地で栽培されたが、いまでは鳥取・千葉二県と若狭沿岸地方に限られている。この文書は、若狭における油桐栽培が天正年間まで遡りうることを示す貴重な史料である。